

「おさしづ」第5巻における本部事情と「道」

『おさしづ改修版』第5巻(明治33～34年)の本部事情における「道」の用例を整理する。第5巻には本部事情の「おさしづ」が48件ある。そのうち、「道」が用いられるのは27件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは19件である。

この時期には、内務省宗教局長の「教義等も十分に組織して、十分な準備を整えて掛からねば到底駄目だ」(『稿本中山眞之亮伝』276頁)との言葉を受けて、一派独立を目指して教義や組織の整備が進められた。そうしたなかで、「この道は……」と、この道を通るうえで大事な点を論される「おさしづ」がたびたび出てくる。以下ではその内容を確認することにした。

この道というは、よう聞き分けくれにやならん

高井つねという個人の身上に関する「おさしづ」において、皆が揃って尋ね出るようにとの言葉をうけて、次の「おさしづ」は伺われたものである。

「この道というは、よう聞き分けくれにやならん。何処から出来たか。どれだけどうこれだけこう、たゞ一つ理遠く所によらず、一つ理から出来た。そこでどんな者掛かっただてこんな者掛かっただて、理に外せば、もの纏まる事出けん。そこで、よう聞き分け。これから一つ何よの事も、何人あれど一人も残らず、又中に不参ある。不参あれど、後から話すれば同じ事、皆惣々中に映す。一人も残らず、それより決議を取りて、どうして貫きたいこうして貫きたい、と言え、神が守護働きする。心そも〜では働かりやせん。たといどういう事すれど、皆道具というもの揃わにやならん。道具揃わにや日が遅れる。あちらへ借りに行けば無い、こちらへ借りに行けば使うて、そちらへ行けば損じたる。道具揃わにや出けんは理。難しい事言わん。仮名な事論し置く。皆心治まり第一。」(さ33・10・20 一昨夜高井つね身上のおさしづより、本部員一同打ち揃うて願)

ここに、「この道というは、よう聞き分けくれにやならん」と仰せられて、教義や組織を整えるなかで、大事な点が論されている。それは大きく分けて二つあると思われる。一つは、「この道」は「何処から出来たか」ということである。もう一つは、「一人も残らず」あるいは「皆心治まり第一」ということである。

この道というものは、どういう処から成り立った

一つ目の、「この道」が「何処から出来たか」ということについて、「一つ理から出来た」と言われ、その「理に外せば」、どんな者が取り掛かったところで何もまとまらない、と論される。現状の元になっているものをしっかりと心に治めることが説かれる。似たような論しに、次のようなものがある。

「この道というものは、どういう処から成り立った。遠い所高い所は何にも分からせん分からせん。一時に出来た道やない。細い道から出来たもの。そこで、もう遠からず道見えるで。心しっかり持って、皆んなの綺麗な心より働きする。……上さえさあと思つたらこれで結構、と思つなれ

ど、この道は容易では行かん。容易では成り立たん。」(さ33・7・14 天理教別派独立の件に付内務省へ書面差し出し置きし処、……御許し下されませうと願)

この伺いにおける差し当たりの関心事は一派独立ということであるが、この「おさしづ」のなかでは「この道」は、単に上(行政当局)の認可が下りればよいというものではなく、「細い道」からだんだんと容易でないな成り立ってきたということをし、しっかり心に持って綺麗な心になるように促されている。同様のことは次の「おさしづ」にも説かれている。

「この道というは、不自由勝難儀仕勝、何言うも彼言うもあろうまい。この道の初め三十八年あと勤め場所〜という。だん〜世界という。今一時やない。年限数え、三十八年あとからだん〜精神定めて通り来た者、何人あるか数えてみよ。調べてみよ。こゝまで作り上げるは容易やない。何か小さいものから、何も要らん〜と云うて、それから出けたる道。」(さ34・10・13 教校教室二棟出来上りに付、後へ事務室二十間に五間物を建築致し度く願)

このように、「不自由勝難儀仕勝」のなか、「何も要らん」というところから年限かけて成り立ってきたことに照らして、一時にどうしようというのではなく、先を楽しみに歩みを進めるよう論される。

この道は人間心で動かせはせん

したがって、皆の心が「この道」の元の成り立ちに沿っていることが肝心である。これが、二つ目の点である。前掲の明治33年10月20日の「おさしづ」に「心そも〜では働かりやせん」とある。「そも〜」というのは、「それぞれに勝手な」というような意味である。皆が勝手な思惑を立てて心が一つに治まっていなければ、神は働けないと説かれている。また、別のところでは次のように言われる。

「この道はどんな者でも、人間心で動かせるか。動かせはせん。神の道やで〜。年限の道からこうのうの理である。天然というものは、一寸には出来たものやない。」(さ33・11・5 大裏へ三間四間建家仕事場のように建てるのを、……並びに中西牛郎は学校専務として御許し願)

「この道」は、たとえどんな者でも人間心では動かせない、と説かれる。これまで「不自由勝難儀仕勝」のなか、年限かけて道が成り立ってきたのは、神が付けてきたからだと言われる。道の発展を考えたとき、それぞれが勝手な思惑を立てるのではなく、この道が成り立ってきたこと、神によって連れて通っていただいている今であることを再確認し、教えをしっかりと心に治めることが大事であると論されている。

このように、第5巻の本部事情における「道」の用例では、一派独立にむけた歩みを進めるにあたって、この道の成り立ちを心にしっかりと持ち、皆がそれに心を合わせて通ることを強調されている。これは、前回までに取り上げた刻限や本席身上願において説かれていることとも相通じている。